

音楽する実存

—教育のバロック—

田 中 智 志

1 バロックの力へ

1 バロックの力

現代フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze 1925-95) の著作『襞 [=折りたたみ]』の最終章は、風変わりな音楽論である。ドゥルーズが、そこで「大いなる音楽」(Musique) と表記する概念は、通念の音楽概念からかけ離れている。ドゥルーズのこの音楽を理解するために必要な思考は、ドゥルーズが同書で17世紀の哲学者ライプニッツ (Leibniz, Gottfried Wilhelm 1646-1716) に見いだしている「バロック」(Baroque) という思考である。

さて、「バロック音楽」といえば、ドイツの音楽家バッハ (Bach, Johann Sebastian 1685-1750) の作品が有名であるが、バロック音楽の特徴は、バッハの対位法というよりも、豊かな感情表現 (と即興性) である。それは、上声・下声 (通奏低音)、緩・急、強奏・弱奏、独奏・協奏といった対比によって、旋律・律動・和音に重層・起伏を作りだし、深い感情、たとえば、罪深さの懊悩のなかで慈愛のもたらす希望を表現することである。

こうした音楽のバロックに対し、哲学のバロックの特徴は、「非-理性」と形容されているが、それだけではない (坂部 2005: 110)。哲学のバロックは、およそドゥルーズの創案であるが、そのドゥルーズが取りだすライプニッツのバロック思考は、端的に言えば、「襞 (折りたたみ)」と形容される思考であり、それは、「魂」(生きる力) が「完全性」(無条件のいのちへの慈愛) に向かうなかで、「調和」への「同調」(共振) が生じることである。たとえば、紙が折りたたまれることで、鶴の形になるように、感覚内容は、心のなかで折りたたまれることで、象られる。その象りのなかで、魂は、他のいのちと同調し、他者と調和していく。ここでは、一人ひとりの魂が、他のいのちと同調し、調和に向かい高まる固有で豊穡な力動を「バロックの力」と呼ぶ。

2 バロックの力を生みだすもの

このバロックの力は、現代社会に溢れているエゴセントリック・コミュニケーションに抗うための礎になりうるだろう。エゴセントリック・コミュニケーションとは、自分の考え・求めを正当化し強弁し、他者の考え方を論難し棄却するコミュニケーションである。これに対し、バロックの力は、個々の思考の「恣意」(自分勝手) を「意志」(よりよく志向) の「現れ」に変えていく。このバロックの力を可能にする思考は、「真理 (真実)」・「完全性」の「ような」可知性が実在する「かのように」(als ob) 措定すること、である。

本論は、このバロックの力という概念で、人の強度に満ちた生存を形容する試みである。この試みは、私なりの教育概念、すなわち「自己創出への支援」の「自己創出」を敷衍することである。自己創出への支援は、みずから・おのずから自分を再構成し展開するという意味の自己創出が他者と共振するなかで支援される、ということであり、それがめざすところは、先にふれたエゴセントリック・コミュニケーションの宥和であり、自分と他者の、人間と自然の調和である。この調和は、たとえば、他者・自然を所有し利用するものではなく、与り使うもの、と考えることである (田中 2024)。

以下、まず、森鷗外の「かのように」論にふれながら、「真実」という可知性の措定が、人が〈よりよく〉生きるうえで必要である、と論じる。次に、この可知性に向かうことは、ライプニッツが「魂の進化」と呼んだ営みであり、それは、音楽に共振するように、人の心が可知性と響きあい、それに引き寄せられることであり、また異なるものが「調和」することでもある、と論じる。最後に、ニーチェの音楽論にふれつつ、人の心は、何かと共振し、それは「詩情」「交感」と呼ばれる「感性のつながり」に見いだされ、この共振する生、すなわち音楽する実存は、バロックの力に彩られている、と論じる (第

4 節)。

2 鷗外の二つの「本当」

1 不在の实在を措定する

明治の文豪、森鷗外(1862-1922)の小説に『かのように』(1912)と題された小品がある(MO 3, K: 坂部 2005: 105)。この「かのように」は、カントの「アルス・オブ」(als ob)の訳語である。これは、神を信仰していないが、神のような超越性を真摯に希求していることを意味している。この真摯に希求される脱信仰態の超越性は、いいかえれば、可感的物体としては、不在であるが、真摯に感じられ象られる可知性としては、实在である。

さて、鷗外は、『かのように』で、アルス・オブという思考とは、「神学でも覗いて見て、これだけの教義は、信仰しないまでも、必要を認めなくてはならぬと、理性で判断した上で[それを]認めることである」と述べている(MO 3, K)。この「理性」は、Vernunftであり、さかのぼれば、神への志向、神性の知識を意味するintellectusを体現する、「神性の言葉」としてのverbum、すなわち、すっかり隠されているが、心に刻まれた「内在の神性」としてのlogosであろう。分節し比較し接続し総合するratioは、可感性(sensibilis 身体で感覚されるもの)を理解する力であるが、この内在の神性に及ぶ力ではない。この可知性(intelligibilis, esse intelligibile 知性が知りうるもの=超越性)は、大まかにいえば、ハイデガーの存在論的「存在」(Sein)、ベルクソンの生命論的「生命」(vie)である。

確認しておく、鷗外が「かのように」で言及している哲学書は、ファイヒンガー(Vaihinger, Hans 1852-1933)の『かのようにの哲学』(*Die Philosophie des Als Ob*)である(VPAO 1918)。800頁を越える同書の議論は、カントの「かのように」の敷衍であるが、驚かされることに、彼は、その「かのように」をニーチェの「真理」論にも見いだしている。つまり、ファイヒンガーは、ニーチェの思想をニーチェが嫌悪したカントの思想と重ねている。すなわち、少なくとも「真理」といわれる可知性を、あたかも在る「かのように」(ニーチェの「仮象」、カントの「統制」)考えてみるという意味で、二人は似通っている、と。

2 措定される真実——二つの「本当」

鷗外は、ファイヒンガーの議論を踏まえつつ、二つの「本当」を区別している。私なりに表現すれば、この二つは、実証された(=事実と確定された)「本当」と、措定された(=信憑性を与えられた)「本当」である。いいかえれば、前者は、可感性である事実(fact)であり、言葉によって明示される「本当」であるが、後者は、可知性である实在(reality)であり、言葉を超えて黙示される「本当」である。ライブニッツの真理(真実)概念を引くなら、前者は「事実の真理」であり、後者は「思考の真理」である(GL, M: sec. 33)。

実証された「本当」は、たとえば「裁判所で証立て」られた「判決文」で語られる「事実」である(MO 3, K: 283)。その事實は、現実世界において、まさに「本当」=真実として意味づけられている。しかし、鷗外にとって「そう云う意味の事実と云うものは存在しない」。人が、自分の「写象を通過した」ものを、「意識せずに詩[作]にしている」からである。「嘘になっている」からである(MO 3, K: 283)。この「嘘」から区別される別の「本当」が措定されなければならない。思いだされるのは、ニーチェ(Nietzsche, Friedrich 1844-1900)の議論である。事実、鷗外は、ニーチェに親しんでいた。たとえば、『假面』や『青年』には、ニーチェの思想が見いだされる。

鷗外の理解するニーチェの思考は、「存在」と「仮象」の乖離のなかで、「仮象」から「存在」に向かう思考が、たえず偶像化・実体化の危うさに晒されながらも、深まることであり、その深まりが、その思考の真摯さを体現している、ということである。ニーチェの思考は、人の思考に本来的に見いだされる力動である(田中 2023b)。その深まりが向かう先は、判然としないが、そうだからこそ、鷗外は、自分を「永遠なる不平家」と呼び、その向かう先を「青い鳥」と呼んだのだろう(MO 3, M: 61)。つまり、鷗外は、悪のなかに善があり、闇のなかに光があるように、「仮象」のなかに「存在」があり、現実の事実のなかに不在の实在がある、という事実をはっきりとらえている。

3 社会的役割の背後

第二の「本当」は、人によって作られた価値であるが、事実として措定されている。たとえば、「小説は事実を本当とする意味に於いては嘘」である。しかし「これは最初から事実がらなくて、嘘と意識

して作って、通用させている。そしてその中に性命がある。価値がある。」「人生の性命であり、価値あるものは、皆この意識した嘘」である。いわゆる事実、すなわち物質系の事実ではないが、語られるべき本態として措定された概念、「第二の意味の本当は、これより外には求められない」(MO 3, K: 284)。

鷗外は、この第二の「本当」の起源をカントの「かのように」という概念に見いだしている。「本当を二つに見ることは、カントが元祖」である、と。鷗外はまた、プラグマティズムの真実も、「かのように」定められた真実である、と考えている。第二の「本当」は、「近頃プラグマチスムなんぞで、余程卑俗にして繰り返している」ものである、と (MO 3, K: 284)。付け加えるなら、「かのように」は、時間にも適用される。それは、たとえば、「過去も未来もないかのように」考えて、私の「現在の瞬間」に専心し豊かによりよく生きること、端的に言えば、いのちとしてただ生きることである。

鷗外はまた、「かのように」という信憑の措定を説明するために、幾何学の概念を援用している。点も、線も、現存しないが、実在するものとして信憑が措定された概念である、と。鷗外は、次のように述べている。「どんなに細かくぼつんと打ったって点にはならない。どんなに細くすうっと引いたって線にはならない。」「点と線は存在しない [= 現実ではない]。[それらは、] 例の [事実を作り出すという] 意識した嘘だ。しかし点と線があるかのように考えなくては、幾何学は成り立たない」。点も線も、在る「かのように」、すなわち「コム・シィ」として、信憑性が措定されている、と (MO 3, K: 284; cf. VPAO: 557)。

ようするに、鷗外にとっては、真理も、美も、神も、「かのように」措定され、希求されるものである。「かのように」がなくては、学問もなければ、芸術もない、宗教もない。人生のあらゆる価値のあるものは、かのようにを中心に行っている。昔の人が人格のある単数の神や、複数の神の存在を信じて、その前に頭を屈かがめたように、僕はかのようにの前に敬虔に頭を屈める。その尊敬の情は熱烈ではないが、澄み切った、純潔な感情」である、と (MO 3, K: 288 傍点は引用者)。人生をかけて追究するものを象るうえで、この透徹し純一の感情以外の、いったい何が必要だろうか。

4 真の生

実在する「かのように」措定される「価値」「性命」は、権力、伝統、名声といった、現実世界を規定する社会的価値ではなく、学問、芸術、宗教を可能にする可知性であり、「澄み切った、純潔な感情」で希求する人に、また、この「純潔な感情」で生きている人に体现される。この「純潔な感情」を体现している人は、架空の人物としてであるが、鷗外の作品のなかで、たびたび描かれている。その一人は、若き鷗外の分身である「秀麿」に「心から爽快 [さ] を覚え」させた、小間使いの少女「雪」である (MO 3, K: 279)。

鷗外は、『妄想』(1911) のなかで、具体的な人のなかにも見いだされるこの可知性を、「役 [割]」を越えた「真の生」と表現している (MO 3, M: 50)。「勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生」といった「役」の「背後にあるあるものが [、] 真の生ではあるまいかと思われる」と (MO 3, M: 50)。「役」は、戯曲『仮面 [= 假面]』(1909) で「仮面」と呼ばれているものであり、この「仮面」は、元をたどれば、ニーチェが『善悪の彼岸』で用いた言葉 Maske である (MO 5, Km: KS 5, JGB: ex. sec. 25, 40)。

さて、鷗外は、現実世界の「役」においてではなく、作品に表現される思考において、現実世界に対し批判的であった。三島が「意味深い」と評し引いている鷗外の言葉を (三島 1968: 55)、かいつまんで引いておこう。鷗外は、「夜中に思った事」(1908) で、次のように述べている。「政府」に禁じられても、「世の人に攻撃せられても」、動じない内容、すなわち権力・趨勢に抗い、それを突き抜ける内容は、それだけで、書く「甲斐」がある。「Nietzsche でも……此の如くに感じて此の如くに書いたのだらう」と (MR 26, Y: 299)。三島は、「ラヂカルなニーチェは時折り深夜ひそかに、そして深夜にだけ、[鷗外の] 書齋に忍びよってくる危険思想であった」と形容している (三島 1968: 55)。

しかし、鷗外は、表現される思考においてのみ批判的であり、自分の「真の生」を具現化できず、虚しく死んでいったのではない。一人ひとりに固有な「真の生」は、一人ひとりが措定するものであり、他人によってあれこれ批評されるものではない。鷗外が見いだした「真の生」は、「役」「仮面」を担いながら生きるなかで、自然に「万有 [在神] 主義」を奉じることであり、いいかえれば、社会的価値 (=

鷗外のいう「役」「仮面」に従いながらも、「本能的」に自然に生きることである（MO 2, S: 342）。「かのように」は、いいかえれば、「彼 [= 可知性への思考] を承認して置いて [しかも] 此 [= 社会的価値への従僕] を維持して行く」ことであり、それは「人間の務 [め]」である（MO 3, K: 276）。次に、鷗外のいう「真の生」を、ドゥルーズのライブニッツ論を用いて、敷衍してみよう。

3 ライブニッツのパロック

1 概念としての神

まず確認するなら、ライブニッツの思想の核心は、教会が人びとに要求する「形式性」（*formalité* 儀式・告白）に示される「硬直した信仰」（*solide piété*）ではなく、人が「理性」とともに構成する「概念」（*notion=conceptus*）としての「神」である（GL, ET: Pr. Pn. 1, 5）。ライブニッツは、たとえば、『形而上学叙説』において、「神」の完全性を「仮説」（*hypothèses*）として語っている（GL, DL: sec. 6 [VI. 4: 1538]; GL, M: sec. 59）。彼は、また『人間知性新論』において、「私たちのなかに神の内在理念（*idée innée de Dieu*） [= 神性] があることを認めるが、[硬直した信仰がいう] 神がいることは、疑いうる」と述べている（GL, NEEH: 346/448）。

したがって、ライブニッツにとっての神は、措定された概念にとどめられている、ということができる。事実、ライブニッツは、『形而上学叙説』で「神は、絶対的に完全な存在者である」という「言葉」（*termes*）は、「もっとも意義ある概念（*notion*）を表現している」と述べている（GL, DM: sec. 1）。この概念は、やはり「人が作る」ものである。少なくともキリスト教思想における神は、人から「隔絶されている」（*absolument*）から、神についての人の思考は、すべて人が措定したものである。概念の神は、措定された可知性である。

この可知性は、神に限られるものではなく、被造物のなかにも、措定される。それは、神が被造物に贈ったと措定されている「いのち」（*vita/vie*）である。このいのちを語るために必要なものは、表現するという営みであろう。ライブニッツから少し離れるかもしれないが、人の表現するという営みは、信じると述べるに通底する象りである。たとえば、野良猫をよく見ると、古い傷跡が見えてくる。それを模写

していると、心のなかに、その猫が懸命に生きてきた姿、子どもをカラスから必死に護ろうとした姿、すなわち、いのちの生きようとする懸命な営みが、浮かびあがってくる。このおのずからの浮かびあがり、表現するという営みである。心は、「生命は大切です」といった記述を越え、生身のいのちに共振し、生きものが分有するいのちを表現する、と考えられる。

2 ライブニッツのパロック

さて、ドゥルーズは、『襞』（「折りたたみ」）で、ライブニッツの思想を「パロック」と形容している。ドゥルーズは、「パロックとは、ある操作のはたらしの様態、ある描線（*trait*）の様態を意味している」と述べ、「パロックの描線は、無限に向かう折りたたみ（*plis*）である」と述べている。この「折りたたみ」は、分かれ方を意味している。魂は、所与の折りたたみをもち、それを「拡げる」（*déplier* 実際に分ける）だけでなく、「新たな折りたたみ」（*replis* 新たな分かれ方）を生みだす。それも限りなく。この無限に増える折りたたみは、それぞれ固有であるが、その総体は、「永遠なもの」（*objet éternel*）を志向し、神・人の、自分・他者の、そして思考・身体の「調和」（*harmonie*）を生みだしていく。つまり、パロックとは、永遠なものに向かい種々の調和を生みだす思考の無限な増殖である。

注目したい考え方の一つは、完全性に向かう「力」が生動性＝活動性であるという考え方である（GL, ET: P. sec. 59）。すなわち、完全性に向かう人の意志の強さこそが善である、という考え方である。これは、いいかえれば、罪過・怠惰・憂愁・無気力といった「悪」は、意志の弱さが作りだす、通念の「快／苦の原理」への囚われの結果である、という考え方である（GL, ET: Pr. Pn. 23-4; P. sec. 21）。「善は、神性の活動（*énagie divine*）から生じ、悪は、被造物の怠惰から生じる」（GL, CD: sec. 72）。ライブニッツにおいて意志を強くするものは、永遠なものに「予定されて調和すること」（*harmonie préétablie* 予定調和）、快／苦の原理を押し退け、永遠なものとおのずから共振することである（GL, ET: P. sec. 51, 59-62）。つまり、精神の意志を後押しするものは、永遠なものとの共振である。

注目したい考え方のもう一つは、先にふれた対比（*contraste*）による概念形成である。これは、たとえば、「不協和音も、適切に鳴るなら、音楽の調和を

示す」ことであり (GL, ET: P. sec. 12)、永遠なものが司る「最善の世界」(mundus optimus) (GL, ET: P. sec. 8) が「呪われたもの」を知ることで象られるということである。ドゥルーズは、「ベエルゼブル (Beelzebul [マルコ 3. 22; マタイ 12. 24]) の憎悪の叫び [=呪われたもの] ……を聞かなければ、私たちは、最善の世界を考えられない」と述べている (GD, P. 102)。この概念の対比は、精神が魂 (身体の受動) のなかにあることに類比される。この対比は、また「慈愛」に対する「憎悪」にも、「明白さ」(l'clair) に対する「薄暗さ」(l'obscur) にも、「永遠なもの」に対する「刹那なもの」にも、「神」に対する「人」にもいえる。

3 世界と魂の進化

次に、折りたたみと「世界」の関係を確かめよう。ドゥルーズのライブニッツにとって「世界」は、多様に「[思考が] 折りたたまれる」ことで作られる。すなわち、世界は、一方で、一人ひとりに「特異に配分された」(distributif) (GD, P. 133) 内面が、折りたたまれて生じるが、他方で、その世界は、およそすべての人に通底している。「世界は、それを表現する[各] モナドにおいて折りたたまれてのみ実在する」が、「すべてのモナドに共通する地平としてのみ……潜在的にのみ、拡大される」(GD, P. 101)。折りたたみの拡大、すなわち「魂の進歩」(progrès d'une âme) は、各自の世界が充実することである (GD, P. 100)。

この魂の進歩は、古来のキリスト教思想を踏まえるなら、知識を欲望するという意味で「呪われたもの」であるが、同時に「可能なかぎり[魂の] 進歩の無限量を解放する」ものである (GD, P. 101)。この「神[の創造]を模倣した」人の「魂の進歩」は、パウロ以来、語り継がれ、近代教育思想の礎ともなった、「より大いなる完全性」に向かい続けるという継続的歩みである。ライブニッツは、「最高の善」である「至福 (felicité) を成り立たせるものは、より大いなる完全性 (Perfection) に向かうという継続的歩みであり、少なくとも同じくらいの完全性を維持しつつ変容させることである」と述べている (GL, CA: 409)。そして「絵画や音楽は、[神の完全性の] 見本である」と (GL, ET: Pr. Pn. 5 傍点は引用者)。

魂の進歩は、先にふれたように、魂が何かに共振することによって始まり、継続される。「[何かが] 出来ることは、[私の心が] 振動すること (vibration)

である」(GD, P. 105)。すなわち、自分を誘い導く何かが現れるということは、その何かが「私」の心に伝わり響くこと、共振することである。その心は、この共振によって新たに生成し変化し進歩していく。それは、いいかえれば、「自己が[新たに] 生成する主体である」ことであり、この生成する主体は、「プシュケー的なもの」(psychique) をふくんでいる (GD, P. 106)。このプシュケー的なものは、「アニマ的なもの」(生動性) である。どちらも、中世神学 (また近世のスピノザ) において語られた「生みだす自然」(natura naturans) の「力」である。

この共振する「力」は、敏感である。ドゥルーズは、この敏感さを「心配性」(inquiétude) と形容している。この敏感さは、他の「力」について「同調」(accord) してしまうという意味で「音楽的」である。たとえば、ある犬が、人の接近、人の臭気、人のもつ棒の動きなどに同調し (= を感知し)、ふりあげられた棒から逃れるなら、その犬は「音楽的」である。この「棒で打たれる」という危険性の感知は、「不協和な同調」(accord dissonant) と呼ばれている (GD, P. 178-9 傍点は引用者)。ちなみに、人は、「不協和音」(dissonance) くらいなら、すぐに感知できるが、動物のように敏感に、危険な「不協和」を感知できない。しかし、人は、動物とちがいで、もっとも協和的な「永遠なもの」を感知できる。

4 音楽の歓び

同調を基本にするという意味で、ライブニッツのいう「魂の進歩」は、「音楽の歓び」(joie musicale) をともなう。この音楽の歓びは、魂が何かと「共振することであり、それは、知らないあいだに[自分と] 調和するもの (harmoniques) を感じとり、さらに遠くに進む力を導出し、何か新しいものを生成することである (GD, P. 107)。少なくともある種の音楽は、人の心を煩わしい世事から解放し、「永遠なもの」に誘う。いいかえれば、音楽の歓びが示していることは、「魂の進歩」が「永遠なものに到達する」ことをめざすということではなく、「何らかの条件のもとで、物体 [= 身体] に重ねられた[心の] 世界 (monde objectif) が、新しいものを主体的に [= みずから] 創出するということ、つまり一つの創造 (une création) を可能にする」ということである (GD, P. 107)。ようするに、魂の進化は、魂の同調 (共振) による、魂に内在する精神の発見であり、その賦活である。

魂が向かう「永遠なもの」は、意味（価値）として固定される偶像ではなく、たえず新たに創出されるもの、いわば「自然（じねん）性」（naturalitas）である（cf. 田中 2024）。この創出、すなわちいのちの創造（生殖・性愛）は、その喪失をともしなう。親子のようないのちのつながりは、和音のような音のつながりであり、一つ一つのいのちの生成消滅（誕生・成長・死滅）は、それが多様なかたちで繰り返されるという律動をともしない、人の心を共振させ、欲ばせ哀しませる。さらに人は、生命の「全体」を象り、その本態である「存在」・「生命」に通じていく（この思考が存在論である）。ようするに、音楽とともに、心が最終的に感じるものは、生命の「全体」を彩る「存在」・「生命」の律動である。

ライプニッツのいう「最善の世界」は、一つ一つのいのちが創出的であること、すなわち活動的＝生動的であることである。それは「新しいいのちを創出する世界であり、〈私的〉な主体性に一定の真実を解放させ〔＝完全性に向かわせ〕る世界である」（GD, P. 107）。「最善の世界とは、〔教会が求めるような〕永遠なものを再生する世界ではなく、〔自分の固有な身体とともに神であるかのように〕新しいものを創出する世界であり、新生性と創造性の力に溢れた世界である」（GD, P. 107）。この創出は、内在する神性の顕現に通じている

この創出は、いいかえれば、「寓喩」（allégorie）としての「頂点」（sommet 尖端）に「力」が向かうことである（GD, P. 170-1）。この頂点は、信仰の対象として語られる明白な中心・本質ではなく、歴史のなかでさまざまに求められる薄暗い焦点・出来である。それは、命題の述語として明示されるものではなく、命題の述語を豊かにする概念に懐胎される措定である。「この頂点は、おそらく大いなる音楽（Musique）であろう」。この大いなる音楽は、「感覚を超える秩序・尺度への知性的な慈愛（amour intellectuel）」と、「身体の振動に由来する感覚的な快楽（plaisir sensible）」を、ともにふくんでいる。すなわち、純一で可知的な「内在する精神」の「垂直方向の和声（harmonie）」と、多様で多感的な「描写を展開」する「水平方向の旋律（melodie）」を。和声は、純一な頂点に向かう知性の共振であり、旋律は、多様な快感を求める感性の共振である。「バロックな音楽の特徴は、〔多様で多感な〕旋律から〔純一で可知的な〕和声を醸し出すこと」、つまり「和声〔＝調和〕の高まり」である（GD, P. 174）。

4 音楽する実存

1 音楽する実存——ニーチェに依りつつ

さて、ニーチェにとって、言葉は、それがどんなに跳躍しても、真実を把握する力をもちえない。言葉は、所詮、喩えにすぎないからである。「私たちが所有しているもの〔＝言葉〕は、事物の比喩以外の何ものでもなく、それは、その根源である本質とまったく一致しない」（KS, I, WLaS: 879/474）。ニーチェにとって、真実は、把握されるものではなく、表現されるものであり、真実を表現できるものは、言葉ではなく、音楽である。ニーチェは「〔音楽に〕くらべるなら、言葉としてのあらゆる現れ〔＝意味〕は、たんなる比喩である。したがって、言葉にできることは、どんなときでも……音楽が体現する〔人の〕最深層に内在するもの〔＝神性〕を顕わにすることではない。……どんな詩作的饒舌も、私たちをそれに近づけることができない」と述べている（KS I, GT: 512/58）。

ニーチェはまた「音楽の力によって〔苦難のなかで真実を希求するという〕熱情（Leidenschaften）そのものは、それ自体を享受する」と述べている（KS 5, JGB: S. 106）。すなわち、〈よりよく〉という熱情は、恚意・悪意などを背景としつつも、それに絡め取られず、純粹なものになる、と。恚意・悪意などに取り囲まれているという「私の重苦しい憂愁は、完全性（Vollkommenheit）という深淵がもたらす安息を求めている。その深淵に向かうために、私は、音楽を必要としている」と（KS 6, NW: 419 強調は原文）。ニーチェにとって、苦境のなかで完全性に向かい続けるという完全性への敢然性は、音楽によって立ち現れる最重要の感情である。この熱情は、鷗外に立ち帰っていえば、綾小路にみなぎる感情であろう。

ともあれ、ニーチェのいう音楽は、特異な音楽である。その音楽は、音楽学によって記述されるものではなく、人を完全性という可知性に誘うというはたらきによってのみ同定されるものである。その完全性は、端的に言えば、かけがえのないいのちという力動への共振（共振・共苦）である。ニーチェが提唱した概念として有名な「力への意志」は、たんにいのちの力動であるだけでなく、いのちという力動への共振、いいかえれば、いのちへの慈愛でもある（田中 2023a）。その共振は、たとえば、新しく生まれたいのちや死に瀕したいのちに対し、私たちが抱く自然な感情、すなわち歓びと哀しみに見いだされ

る。ようするに、人は、いのちという力動に共振し、それを慈愛する存在者であるという意味で、本来的に音楽する実存である、と考えられる。

2 社会を支える感性のつながり

「感性」(sensibilitas/sensibility)は、たんなる五感にとどまらず、いのちのつながりを感じ、いのちの活動を歓ぶことでもある。いいかえれば、一つのいのちは生成し消滅し、それに儚い尊さ(哀しみと歓び)を感じる。身体の温もり・交わり、性愛の快楽・忘我だけでなく、外在の自然も、このいのちの生成消滅、儚い尊さを暗示している。たとえば、朝日の清々しさ、新緑の鮮やかさ、紅葉の照り輝き、夜空の星の遙かさも、生命の「全体」、万象の「全体」を暗示し、一つのいのちの生成消滅、儚い尊さは、こうした「全体」を背景としている。「存在」・「生命」が、生命の「全体」に見いだされる通底性であるなら、いのちのつながりを感じる感性は、具体的なこのいのちから生命の「全体」、万象の「全体」を遡及的に象る思考の礎である。アドの表現を借りつつ、述べるなら、プラトンは「感性の認識が、魂の推論 (le raisonnement de l'âme) を妨げる」と論じたが (Hadot 2001: 234)、感性は、むしろいのちにかんする推論の前提である。感性を軽侮する人は、自分の自己創出、すなわち自分に対する自分の教育も、他者の自己創出への支援も、理解できないだろう。

現代社会が、こうした感性を看過しがちであることは、コミュニケーションの様態によく示されている。現代社会のコミュニケーションは、いのちへの「慈愛」よりも、配分・分配の「平等」(equality)・「公正」(collectness)を規範とし、「包摂」(inclusion)の具現、「多様性」(diversity)の容認を目的としている。どれも正しい原理・規範である。そして、それらに逸脱・違反するコミュニケーションは、厳しく処罰されている。その処罰のなかで、感性は、遠ざけられていく。処罰が、感性ではなく、個人主体を前提にしているからである。「責任能力」をもつ「法的な人格」と呼ばれる個人主体は、自分を超えてつながる他者になど言及せず、基本的に自己に言及するため、しばしば自分の恣意を正当化していく。いいかえれば、現代の規範・目的は、ときに自分のエゴセントリズム(「私は正しい!」という恣意)を正当化し、他者を論難し処罰する道具として利用されていく。

バロックの力が示唆することは、こうした個人主

体を前提とした、法制によって制御されたコミュニケーションではなく、感性のつながりを前提とした、協和・協奏に彩られるコミュニケーションである。この感性のつながりは、可知性(「存在」・「生命」)に向かう垂直方向の象りを必要としている。この可知性への象りは、「詩情」(poetical sentiment)といいかえられる。それは、たとえば、心の美しい人や、先に述べた朝の陽光に清浄さを感じることである。ルソーの言葉を借りていえば、「人の[感動する]心(cœur)にあるものは、自然の光景の生命(vie)であり、その生命は「甘美な旋律」である(OCR 4. E: 431)。詩情の象りは、一人ひとりに特異であり、これまで「啓示」・「靈感」と呼ばれてきたが、けっして超自然的ではない。詩情の象りは、人がいのちに対する無条件の慈しみを抱くとき、いいかえれば、他者と交感するときに生じる、心の基底的営みである。

3 エゴセントリズムと詩情の象り

さて、教育という営みが、人の自己創出を支援することである、とするなら、その教育は、この詩情の象りを土台としなければならない。その端緒は、あちこちに・さまざまに散種されている。具体的にいえば、旋律、言葉、表情、声などの人為は、感性のつながりを想像させる。たとえば、わずかな旋律を聴いただけで、幼いころの情景が蘇ったことはないだろうか。人のささやかな営みは、自我を越える、他者との感性のつながりを想像させ、ありふれた自然の営み、たとえば、先にふれた朝日、新緑、落葉、星空などは、その事実を越える、生命・万象の「全体」を想像させる。詩情とは、ささやかな・ありふれた事実から、自我・認識を越える可知性＝超越性を象ることである。

こうした詩情の象りは、規範への随順が要求する制御されたコミュニケーションに満ちたこの社会を生きるために必要な「仮面」を支えている。しかし、確認されるべきことが二つある。第一に、詩情の象りは、すべての人に平等に現れない。自分の考え方が絶対に正しく、自分の考え方に反するものは、すべて過誤・暴力・犯罪であると喚き立て、賠償と称し金銭を要求・強要する人もいる。また、他人の不幸に「哀れみ」(compassion)を抱き、慇懃無礼にお悔やみを述べるが、他者とともに苦しむという「共苦」(compassion)をまるで感じない、という人もいる。ある人は「不幸はだれにでもあり、なくならないし、

他者とともに苦しんでも、何の意味もない」といった。第二に、近年、社会全体がますます「情報処理」「知識社会」「AI利用」に向かうなかで、詩情の象りが、忘失されているように見える。詩情が、情報（記述された命題）ではないからである。

たしかに、エゴセントリズムをふくめ、この社会のさまざまな不条理を規範で補正・修正することも大切であるが、そうした規範の増設、つまりガヴァナンスの充実だけを考えることは、コミュニケーションの根底を成している感性のつながりを看過することである。ガヴァナンス肥大化に抗うことは、「かのように」の思考、またバロックの力を現代に生かすことである。感性のつながり、生命・万象の「全体」を象る詩情の象りは、それらを在る「かのように」思考することであり、そうすることは、よりよい「人間性」(humanity)の可能性を肯定することである。教育が、詩情の象りを醸成し、音楽する実存として現れるバロックの力を保全するかぎり、その力は、エゴセントリズムによって破壊されたり忘失されたりしないだろう。それどころか、バロックの力は、他者との共苦とともに、他者を苦しめる困難を他者とともに乗り越えるという意味の人間の支援を開始するだろう。バロックの力に彩られた教育は、「教育のバロック」と呼ぶことができる。

〈文献〉

坂部恵 2005 『モデルニテ・バロック——現代精神史序説』哲学書房。

田中智志 2020 『独りともに在る——スピノザと象りの教育思想』一藝社。

田中智志 2023a 『完全性概念の基底——ヨーロッパの教育概念史』東信堂。

田中智志 2023b 『超越性の教育学』東京大学出版会。

田中智志 2024 『感性の知性——交感し想像する』一藝社。

三島憲一 1968 「鷗外と貴族的急進主義者としてのニーチェ」『ドイツ文学』41: 48-57。

森林太郎 1971-75 (1986-90) 『鷗外全集』木下杢太郎ほか編 全38巻 岩波書店 [ab: MR]

Y = 「夜中に思ったこと」第26巻。

森鷗外 1995 『森鷗外全集』全12巻 筑摩書房（文庫）。[ab: MO]

K = 「かのように」第3巻。

Km = 「仮面」第5巻。

M = 「妄想」第3巻。

S = 「青年」第2巻。

*

Deleuze, Gilles 1988 *Le pli: Leibniz et le Baroque*. Paris: Les Editions de Minuit. [ab: GD, P]

Kant, Immanuel 1974 *Immanuel Kant Werkausgabe*. 12 Bde, hrsg., Wilhelm Weischedel. Frankfurt am Main: Suhrkamp Taschenbuch Verlag. [ab: KW]

KrV = *Kritik der reinen Vernunft*, 1781/87, KW, Bd. 34.

KpV = *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788, KW, Bd. 7.

Leibniz, Gottfried Wilhelm 1875-90 (1965) *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, Hrsg. K. I. Gerhardt, 7 Bde. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung (Hildesheim: Georg Olms Verlag). [ab: GP]

LB = *Leibniz an des Billettes*, GP, Bd. 7.

Leibniz, Gottfried Wilhelm 1923- *sämtliche Schriften und Briefe*, Hrsg. von Preußischen/Deutsche Akademie der Wissenschaften, Serie I-VIII. Darmstadt/Berlin: Akademie Verlag. [ab: GL, A]

Leibniz, Gottfried Wilhelm 1969 *Essais de théodicée*. ed. J. Brunschwig. Paris: Garnier-Flammarion. [ab: GL, ET Pr. Pn=Préface paragraphe number; D. sec=Discours section number, P. sec=Partie section number]

Leibniz, Gottfried Wilhelm 1969 “La cause de Dieu,” in *Essais de théodicée*. ed. J. Brunschwig. Paris: Garnier-Flammarion. [ab: GL, CD, sec = section number]

Leibniz, Gottfried Wilhelm 1990 *Nouveaux essais sur l’entendement humain*, ed. J. Brunschwig. Paris: Garnier-Flammarion. / 1987 ライブニッツ（米山優訳）『人間知性新論』みすず書房。[ab: GL, NEEH]

Leibniz, Gottfried Wilhelm 1996 “Monadologie,” in *Principes de la nature et de la grace / Monadologie, et autres tetes 1703-1716*. ed. Christiane Fremont. Paris: GF-Flammarion. [ab: GL, M]

Leibniz, Gottfried Wilhelm 1996 “Principes de la nature et de la grace fondés an raison,” in *Principes de la nature et de la grace / Monadologie, et autres tetes 1703-1716*. ed. Christiane Fremont. Paris: GF-Flammarion. [ab: GL, PNG Pn = paragraphe number]

Leibniz, Gottfried Wilhelm 2016 *Discours de métaphysique / Correspondance avec Arnauld*, ed. C. Leduc. Paris: Librairie Philosophique J. Vrin. [ab: GL, DM/ GL, CA [] 内は GL, Aの巻数, 頁]

Nietzsche, Friedrich 1999 *Friedrich Nietzsche sämtliche*

Werke: Kritische Studienausgabe, in 15 Bdn. Berlin and New York: Walter de Gruyter. / 1979-87 ニーチェ (浅井真男・蘭田宗人ほか訳)『ニーチェ全集』第Ⅰ期12巻、第Ⅱ期12巻 白水社. [ab: KS; sec=Section number]

A = *Der Antichrist*, 1888-89, KS, Bd. 6. / (西尾幹二訳)「アンチクリスト」II-4.

ASZ = *Also sprach Zarathustra*, 1883-5, KS, Bd. 4. / (蘭田宗人訳)「ツァラトゥストラはこう語った」II-1.

GM = *Zur Genealogie der Moral*, 1887, KS, Bd. 5. / (秋山英夫/浅井真男訳)「道德の系譜学」II-3. [V=Vorrede, A=Abhandlung]

GT = “Die Geburt der Tragödie,” 1872, KS, Bd. 1. / (浅井真男訳)「悲劇の誕生」I-1.

JGB = *Jenseits von Gut und Böse*, 1886, KS, Bd. 5. / (吉村博次訳)「善悪の彼岸」II-2.

NF = *Nachgelassene Fragmente*, 1869-89, KS, Bd. 7-13. [sec. * [*] は各巻の通し番号]

NW = *Nietzsche contra Wagner*, 1889, KS, Bd. 6. / (浅井真男訳)「ニーチェ対ワーグナー」II-3.

WLaS = “Ueber Wahrheit und Lüge im Aussermoralischen Sinn,” 1873, KS, Bd. 1. / (西尾幹二訳)「道德以外の意味における真理と虚偽について」I-2.

Vaihinger, Hans 1918 (1911) *Die Philosophie des Als Ob: System Der Theoretischen, Praktischen Und Religiösen Fiktionen Der Menschheit Auf Grund Eines Idealistischen Positivismus, Mit Einem Anhang über Kant Und Nietzsche*, 3e Auflage. Leipzig: Verlag von Felix Meiner. [ab: PAO]